文化の本質に関する一考察

兪　　慰　剛

一、問題の提起

“文化”という言葉は人々に日常で平気に使われている。しかし、一旦“文化とは何か”と問い詰めると、案外答えはバラバラである。中国では一部の知識人のなかでも良く“知識があるんだが、文化はない”という言い方で知識人を揶揄する。人々は自分なりに“文化”と言うことを定義している。未だに、共通して認められている定義がないようである。このたび新潟大学で一年間教鞭をとる機会に恵まれ、しかも担当する科目のほとんどは直接“文化”と関わっているので、“文化”とはなにか、どのように理解すればいいのかを資料等で良く調べて考えて見ることにした。まず、現代検索サービスバイドゥで検索してみたら、“文化”に関する定義は二百余りに達しているということを知った。なら、果たして“文化”ということはどのように理解をすればいいなのかを自分なりに考えざるを得ないのである。講義を執筆するときにさまざまな資料を読んで、いろいろと考えた上、その結論をこの拙稿にまとめて、一つの見解として公にし、法家に示唆を乞う次第である。

二、文化に関する先行研究

上述のように、“文化”を明確に定義することはなかなか難しいことである。多くの学者や文化人は“文化”と言うものの本質を考えて、自分なりの意見を出されている。ここでいくつかの解釈と定義を取り上げって分析しておく。

台湾作家、文化行政を管理している政府役人でもある龍応台は“文化とは何か”という文章を発表した。彼女は自分自身の感じたことを直接的にこの文章に盛り込んだ。明確的な定義を下ってはないものの、文章のところ処に“文化”に関する認識を説明している。例えば、“文化？それは向こうから来る人の手振り身振り、笑い方、それにその人の全体的な気質である”。普段人と人との接し方はその人の品質を表している。人の“品質、道徳、知恵たるものは文化蓄積の集大成である”。故に彼女は“文化は代々蓄積して残してくれた習慣と信念であって、生活実践の中に浸透しているものに過ぎない”と指摘した。また、彼女にとって“日々を如何に送るのも文化である”、つまり、生活の態度や方式そのものは文化である。そして、それは“特定の地理、歴史、経済、そして政治条件の中で形成した”のであると指摘する。彼女はまた社会学の視点から“文化は即ち公民社会にとって最も重要な接着剤である”と言う。彼女にとて、人々はそもそも散らかっている真珠であって、文化はその柔らかく、忍耐力の強い糸であるようにそれらの真珠を貫いて社会を形成したのである。最後、彼女は

ですから、文化は基礎的な国民教育であって、文化は国民の品質と教養を定めるものである。文化は生活であって、文化は我々の目で見たもの、耳で聞いたもの、手で触れたもの、そして心で考量したものなど全体的な環境の美醜を決定しているのである。文化は経済であって、文化の産業的な価値、つまり媒体、設計、建設、音楽、映画、IT、広告、文学、体育、観光などは早くから先進国家の重要な経済項目となっているのである。文化は外交であって、政治談判が行き止り、軍事行動が不可能なときに、文化は敵意を取り除く唯一な方法である。とりわけ弱小国家にとって、文化は柔軟性を持って剛を克服する軍隊になれるし、柔らかく浸透力のある武器にもなれる。さらに、文化はさらに一つの国家の心霊と頭脳であって、この国家の思想はどれほど深いか、この国家の想像力はどれほど活発しているか、創意はどれほどロマンチックであろうか、この国家のチャレンジ精神と自ら超越する精神はどれほど旺盛的であるか、これらのことは徹底的にこの国家の本当の国力と未来を定めているのである[1]

と指摘した。彼女のこのような認識は“文化”の効用を述べていたのである。現実的に見れば理解しやすい解釈であるだが、そもそも“文化”の原点的な意味で考えるとこれは依然として明確的なものではない。

鄒賛は『表征与意指実践』という論文でストアート・ホール（Stuart Hall）の“文化”に関する研究成果を紹介していた。ホールは“文化”（culture）という言語の根源の意味は“栽培”（cultivation）であると指摘した。最初は植物を栽培する意味であってが、後に心霊の育成に転じたのである。鄒賛のまとめによると、ホールにとって“文化”は即ち“表象と意指の実践”である。その内包は以下のようなものである。

文化は表象と意指の実践に通して作られた、文化が使用した記号は任意性があり、故に外部物質世界と符合する関係は存在しない；文化は一つの解釈と意義との世界であって、一つの集団あるいは団体の間に共に享受する意義に関わっているものである；表象の過程に参与する方は（生産する方と消費する方）共に意義の争奪に巻き込まれ、このような争奪は言語の方式を通して進行したのである；その意義は純粋に個人的なものになるのは不可能で、それは一種の対話であって、各方面で協商した結果である；意義は常に不平等的な交換であって、その中に複雑な権力関係を隠している[2]。

のである。ホールの解釈はかなり抽象的で、理論的なものであって、強調しているのは表象、意指、記号など集団的に享有するものである。このような単語だけでも“文化”の意義と表象を良く現れているのである。

李徳順は“文化の本質は‘人化’と‘化人’である”と指摘する。かれにとって“文化”という語彙は動詞である。“人化”というのは“人の方式によって世界を変えていく、あらゆるものに人文の性質を押し付けていく”ことである。また、“化人”と言うのは“逆に世界を改造した成果を持って人を育ち、人を装備して、人の質を高め、そして人をより

1　龍応台著、『文化是什么』、www.peoploe.com.cn2005年10月19日08:41。
2　鄒賛著、『表征与意指実践』、『石河子大学学報』（第23巻第２期、2009年４月）、第89頁。

全面的、より自由的に成長させる”[3]ことである。ここで、李氏は“文化”を動詞として扱うのは面白くて、啓発的な論述である。

許嘉璐も『文化とは何か』というタイトルで“文化”を研究した。かれは“文化は人化”であるという説に賛同する。彼は言う。

> 広義的に言うと、文化は人類が創造したすべての物質的、精神的な成果である。文化は必ずや人類が創造したものである。例えば、黄果樹の滝、九寨溝の景観は文化ではなく、それは大自然が恵まれたものである。しかし、黄果樹の滝のわきにある亭や、九寨溝にいるチベット族の娘たちの情熱的な接待は文化である。

また、

> 狭義的に言うと、文化は人類が創造した精神成果である[4]。

この説は比較的に共通的な定義である。かれは強調したのは“人類が創造したもの”であって、しかも、“人のいるところに文化がある”と言うことである。つまり、人間が創造したもの以外には文化がない。このことは大変重要なことである。

上述のように、一般論や学術的な角度から“文化”にさまざまな定義をあたえたのである。これらの説は、少なくとも以下のようないくつかのヒントを与えてくれてたと思う。まず、“文化”は人と直接結びついているのであって、人類が創造したものである。第二、文化は表象的なもので、記号的なものであって、意志的に実践したものである。第三、文化は人類の躾や、社会生活の様式と関わっているのである。本稿はこれらの研究成果を基礎にし、“文化”と言う言葉の語源を考察し、自分なりの認識を表したいのである。

三、“文化”を文字からの分析

(一)“文”に関する解釈

『礼記・楽記』曰く：“五色成文而不乱”。この解釈は“文”というのは五つの色で構成したものであって、そして秩序があって乱れていないものである。“文”を理解することに対して大きな影響がある。

『説文解字』：文は“錯畫也。象交文。凡文之屬皆从文。”

段注は曰く。

> 錯は遣に当たる。(遣とは交差という意味である。)遣画というものは交差する画也。『考工記』曰く：青と赤とは文と謂う。遣画の一端也。遣画というのは、文の本義である。遣彰というのは、遣の本義であるが、意味は同じでない。黄帝の史倉頡は鳥や獣の足跡

3　李徳順、2011年12月24日中国政法大学での報告、タイトルは『文化の本質は‘人化’と‘化人’である』。ネットでの発表時間は2012年３月26日、『光明日報』。

4　以上許嘉璐著、『文化是什么』、『中国社会報』、2006年６月２日。

を見て理の別れと相違を分けることが可能になることを知って、初めて文字を作る。類によって形を象って文となる。

段はまた言う。

両紋が互いに交差するに似ている。紋とは、文の俗字である。

つまり、“文”とは“紋”であって、色の付いたものである。

しかし、『説文解字』では“紋”と言う字は見つからない。紋の本義は織物であって、模様をつけることである。また、器物の破裂した模様でもある。『玉篇』(543年)では“紋、綾紋也”と言う。“紋”の一つの解釈は文身である。つまり、人の体に紋様をつけることである。

白川静の『漢字の世界』で“文”の最初意義に関する論述はこの解釈と一致している。白川静は許慎の“錯畫也。象交文”という解釈を認めなく、考古学の成果を用いて、文を以下のように解釈している。

卜文・金文には、文の字形が極めて多い。その基本形は、大と比較して知られるように、人の立つ正面形である。ただ胸の部分が大きくしるされており、そこに∨形・×形・心字形、あるいはの変化形を加えている。それは明らかに胸に加えられている文様であり、文身である。すなわち文の字形は胸部に施されている文身を示し、字の初義も文身の意である[5]。

この引用文の次に白川静は『春秋穀梁伝』や、『荘子』、『墨子』、『礼記』など古典の字六を取り上げて、中国古代に“断髪文身”、“被髪文身”といった文身の風俗があると指摘した。

実は早く中国の学者朱芳圃も1962年に出版された『殷周文字釈叢』のなかで“文はすなわち文身の文であって、人が正面に立っている形に似ている、胸の前のノ、メは……即ち刻んでいた文飾也……文は訓して錯畫とは、派生するの義也”と明確に指摘している。したがって“文”の解釈の第一条は“(皮膚の上で)刺して花紋を画”としている。これらの解釈の例文には“范甯注:‘文身、刻画其身以為文也’”という文がある。その第二条目は“紋理、花紋”であるという[6]。この辞書に書かれた解釈は“文身”や“模様”を基本としているのである。“文化”を正しく理解するにはこの解釈を無視してはいけない。

『日本国語大辞典』では“文”を九つの面から解釈している。その一は“外見を美しく見せるための飾り。もよう。あや”である。その二は“文書、詩文。転じてそれらを集めた書物”である。その三は“文学。学問。学芸。また、これらを励み治めること”である。その四は“みやびやかなこと。派手なこと。文雅”である。その五は“格言。成語。また、

5　白川静著、『漢字の世界Ⅰ』、平凡社、2011年3月20日、第37～38頁。
6　以上、『漢字大字典』(四川辞書出版社、湖北辞書出版社、2010年)、第909頁。
7　以上、第二版(2002年３月)、第11巻第1108～1109頁。

典拠”である。その六は“文身をすること。文身で飾ること”である。その七は“‘文官’の略”である。その八は“文法上の言語単位の一つ。文章、談話の要素”である。その九は“(‘文庫’の略）土蔵を言う、盗人仲間の隠語”[7]である。この九つの面ではその一とその六の意味は似たようなものである。しかし、“文”の文身という解釈はすでに第六番目の意味としたのであるが、最初の“あや”と言う解釈も模様であることを注目すべきなのである。

諸橋轍次の『大漢和辞典』中の“文”に関する解釈も三つ部分に分けている。第一部分の解釈には25条目があるが、ここでいくつかの関係する解釈を取り上げる。まず指摘したのは第一の解釈“あや”である。彼はこの“あや”をまた四つの表現にまとめた。①色を交差させて画きだした系統のある模様。かれは中国古典をもってその根拠としたのである。それは“〔説文〕文、錯畫也。象交文。〔王注〕錯者、交錯也、錯而画之、乃成文也、易繫辞、物相雑、故曰文、錯斯雑矣。〔周禮、天官、典絲〕共其絲紘組文之物。〔注〕青與赤謂之文。〔禮、楽記〕五色成文而不乱。〔孟子、告子上〕所以不願人之文繡也。〔注〕文繡、繡衣服也。〔太玄経、玄掜〕[8]文為藻飾。〔曹植、七啓〕爾乃御文軒。〔注〕善曰、文、画飾也”である。②いろ。いろどり。根拠としては“〔山海経、大荒南経〕赤水之東、爰有文貝。〔注〕即紫貝也。〔山海経、海内西経〕開明北有文玉樹。〔注〕文玉樹、五采玉樹也。〔後漢書、班固伝上、揄文竿出比目、注〕文竿、翠羽為文飾也”である。③かた。もよう。まだら。その根拠は“〔山海経、中山経〕睢水、云云、多文魚。〔注〕有斑采也”にある。④もくめ。木理。この根拠もやはり中国古典の『韻会』にあり。その文は“文、理也、如木有文、亦名曰理”[9]である。上述の解釈は“文”と謂う字の基本的な意味である。これはの基本的な意味をまとめて見ると、“文”は綾であって、彩って物事を粉飾するものである。この意味に近い解釈は第二部分の第一の解釈“かざる”である。その釈文は“彣に通ず。〔説文通訓定声〕文、叚寫借為彣。①あやを施す〔広雅、釈詁二〕文、飾也。〔国語、晋語八〕分錯其服。〔注〕文、文織。〔荀子、儒効〕取是而文之也。〔注〕文、飾也。②ととのえる。〔論語、憲問〕文之以禮楽。〔集解〕孔曰、加之以禮楽、文成。③つくろう。〔論語、子張〕小人之過也、必文”である。この部分の第二の解釈は“いれずみをする”である。その釈文は“〔禮、王制〕東方曰夷、被髪文身。〔注〕彫・文、謂刻其肌以丹青涅之”[10]である。この“文身をする”と言う解釈は白川の解釈と一致しているが、動詞として使うのである。これらの解釈の大半は模様、装飾の意味を中心としたのである。特に“文為藻飾”という引用文は最も明らかに“文”の最初の意を表したのである。

(二)“化”について

『説文解字』：化は“教、行也”。

段注は曰く。

上において教、行をすれば、すなわち下には化けて成る（化成する)。賈生は曰く：

8　“掜”は一説として木偏の“梲”と言う字である。二字共に似るという意味がある。発音も同じ。
9　以上は『大漢和辞典』（大修館書店、平成十三年）第五巻、第560～561頁。
10　以上同上注、第561頁。

この五学というものは既に上に於いてなり、すなわち百姓黎民は教化を受けてその下で和平して睦んでいた。老子曰く、我が無為にして、民は自ら化成する。

また、『説文解字』では

“匕”は“変わる也。”段曰く：“凡て変化は‘匕’と作るべし、教化は‘化’と作るべき”。

つまり、“化”とは人の飾り物を変化していくことである。

『日本国語大辞典』では“化”と言う字を名詞としての解釈は四つの方面がある。その一は“徳によって人民を善良に導くこと。感化”である。そして、多くの日本著作と中国の著作をもってこれを証明する。その釈文は次の通りである。“平家（13C前）五・勧進帳‘尭舜無為の化をうたひ’＊徒然草（1331頃）一七一‘恵をほどこし、道を正しくせば、その化遠く流れん事を知らざるなり’＊太平記（14C後）龍馬進奏事‘只奇物の翫をとめて、仁政の化を致されんには如不’＊寄笑新聞（1875）〈梅亭金鵞〉四号‘その化四境に溢れその沢異邦に及ぶ’＊真理一斑（1884）〈植村正久〉二‘唐虞三代の道を祖述して化を天下に布かんとせり’＊呂氏春秋－士容‘淳淳乎、慎謹畏化、而不肯自足’”である。また、接尾詞としての解釈は“名詞の下に付けて、そういう物、事、状態に変える、または、かわるという意を表す”である。この“変化”と言う意味での解釈の用例としては、中国古典から“文化、教化、変化、造化”など、そして日本近代造語から“醇化、悪化、緑化、強化、硬化、液化、気化”[11]などを挙げた。ここでは“文化”は“文”を“化”するという名詞と動詞との組み合わせで構成した語彙であることを確認したのである。そして、この辞書では変化として“化”を解釈したのは第三番目の解釈としたのであることを確認したのである。

しかし、諸橋轍次の『大漢和辞典』では“化”を“匕”部属することにした。上述のように、『説文解字』では“匕”は“変わる也”と言う。そして、段玉裁は注で“凡て変化は‘匕’と作るべし、教化は‘化’と作るべき”と言う。故に、諸橋はこの字の変化の意を基本的な意味として解釈したのである。古代では“匕”は“人”と言う字を逆さにしたものである。“人”が逆さになるのは死と言う意味なのだ。つまり、生きている人は死に変化していくという意味なのだ。後になって“人”と“匕”を組んで“化”に成るのである。故に、『大漢和辞典』では“化”の第一の意味としては“あらたまる”と解釈する。つまり、“上の教が行われて、下民の風がうつり改める”と言うことである。その例文としては『華厳経音義・上』の“教成於上、而易俗於下、謂之化”と『荀子・七法』の“漸也、順也、靡也、久也、服也、習也、謂之化[12]”、そして『荀子・不苟』の“神則能化矣”[13]等が挙げられている。第三の解釈は“おしえる、みちびく”である。例文として『正韻』

11　以上『日本国語大辞典』第二版（2002年３月）、第３巻第128頁。
12　諸橋轍次は誤っている。『荀子』には“七法”編はない。“七法”は『管子』の中のものである。ですからここでは『管子・七法』であるべき。
13　以上『大漢和辞典』（大修館書店、平成十三年）第二巻第436頁。

の“化、告誥諭使人回心曰化”と『書・大誥』の“肆予大化誘我友邦君”等を挙げいる。そして、第五の意味は“めぐみ。教化”である。例として『史記・建元以来侯者年表』中の“変道行化”を挙げている。そのほかに“化”には未だ“おしえ”、“そだち”、“風俗”、“化ける”、“かわる”、“うつりかわる”[14]等変化、教化という意味での解釈を並べている。つまり“化”とは“教化”、“化ける”、“移り変る”といったのは主な意味である。

（三）“文化”について

『易経・賁卦』には“観乎天文以察時変、観乎人文以化成”とある。『後漢書・荀悦伝』には：“宣文教以章其化、立武備以秉其威”と記している。これらの解釈はいずれも変化という意味である。しかも、その変化は人や“人文”、そして“文教”と関わっているのである。

『日本国語大辞典』では“文化”を二種類に分けて構成している。一種類は文化を名詞としての意義から紹介する。この部分ではまた四つの方面から述べている。第一方面はこのように言う。“権力や刑罰を用いないで導き教えること。文徳により教化すること。”つまり、文化は社会への教化にとって柔軟的な力であって、暴力的強制的な力ではない。第二は“世の中が開け進んで、生活内容が高まること。文明開化”と言う。第三は“自然に対して、学問・芸術・道徳・宗教など、人間の精神の働きによってつくりだされ、人間生活を高めてゆく上の新しい価値を生み出してゆくもの”とある。第四はほかの単語の上に付いて“便利である”、“ハイカラ”、“モダン”及び“新式である”と言う意味を表す語である。ここでは一から三までの意味は文化の本義を表すものであって、“文化”の定義である。最後のものは造語用の表現用語である。第二の種類は特別の使い方とこの語彙としての形成過程を説明する。特別の使い方とは江戸時代の光格、仁孝両天皇の代の年号である。その語誌はまた二つの部分に分けている。その一は“漢籍に見られる語であるが、明治時代に‘文明’と共にcivilizationの訳語として使用され、当初は‘文明’が‘文明開化’という成語のによって明治時代初期から一般的に使用されていたのに対して、‘文化’が定着したのは遅れて明治20年前後である。”その二は“明治30年代後半に成ると、ドイツ哲学が日本社会に浸透し始め、それに伴い‘文化’はドイツ語のkulture（英語のculture）の訳語へと転じた。そのことによって、次第に‘文明’の違いが強調されるようになった。大正時代になると、‘文化’が多用されるようになり、‘文明’の意味をも包括するようになってきた。”[15]

諸橋轍次の『大漢和辞典』では“文化”四つの解釈があるが、その中の第一と第二の解釈は文化の意義と関わっている。第一の解釈は『日本国語大辞典』の解釈と似ている。その釈文は“刑罰威力を用ひないで人民を教化すること。文治教化。〔説苑、指武〕凡武之興、為不服也、文化不改、然後加珠。〔王融、三月三日曲水詩序〕設神理以景俗、敷文化以柔遠。〔束晳、補亡詩〕文化内輯、武功外悠”である。釈文にあげられたの例は全て中国の古典であるので、中国的な文化に関する解釈とも言える。第二は解釈はドイツの“kultur”と英語の“culture”との訳語である。この釈文は“自然を純化し、理想を実現せんとする

14　以上『大漢和辞典』（大修館書店、平成十三年）第二巻第1518～1519頁。
15　『日本国語大辞典』第二版（2002年３月）、第11巻第1111頁。

人生の過程。即ち、人間が自然を征服支配して、本来具有する究極の理想を実現完成せんとする過程の総称。かかる過程の産物は、学問、芸術、道徳、宗教、法律、経済などである。”[16]ここでの二つの解釈は違った視角から“文化”を見るのである。一つは対人関係で、“人民を教化”する。一つは人間が自然を征服支配しょうとする過程である。

四、私の“文化”対する認識

上述のように、定義や言語の面から“文化”に関する解釈や論述は周到なものである。それでそれらの定義を鵜呑みして完全に受け止めることが出来るかと思うと、やはり納得できるものではない。そこであえて“文化”と言う二字をもう一度考えて、試しに自分なりの認識をあらわしたいのである。

まず“文”の定義を考えて見る。つまり、人類は最初の時に身には何も纏ってないので、何とかの方法で自分自身を粉飾しようと思うのではないか、すると“文身”というものが現れたのである。今にしても、まだ、森の中に生活している原始部落の人類は服がない、体や顔にさまざまな模様を描いたり、装飾物をつけたりして、自分自身を美しくするのである。勿論、一部の装飾は只美しくするためでもない、現実に原始宗教や、生存する手段でもあるのではないか。そこで、白川静の“文”に関する解釈から考えてみると、“文”は人類の文身から濫觴するものであるはずである。勿論、文身はいろんな人類の意識と人類集団の中での秩序とも関わっているのではないかと思う。同じ集団の人では割りと同じような価値観、美に関する感覚を共有するのである。故に、同じ部落の人につけた模様はよく似ているのである。これは正に同じ地域の人々が共有している文化の価値観が一致しているということを表しているのである。

そして、“化”と言う字はやはり教化、変化と言った意味で理解するのがいいと思う。人（イ）は生まれから死に変わって（匕）いく。このような過程は誰でも経過しなければならないのである。そしてこの過程で行われたことや物、ないし美の観念などを集団の間で、言葉や、手振り身振りして皆に教え、押し広げていって、継続していくのである。これは正に“観乎人文以化成”、“宣文教以章其化”という意味である。

このようにして、われわれは“文化”と言う概念を、人や、人類が自分自身を装飾することや、理念を表すものであって、そしてそれらのことを同類に教えて、広く浸透していくことであると定めることができるのではないか。それを人間に例えると、つまり、人や人類は骨組であって、文化はそれを包む、装飾する肉と衣装のような物である。この上でより広い範囲で考えてみると、あらゆる人類の行動や、顕在的なものと抽象的なものを装飾するもの或いは粉飾していくことは“文化”である。このような装飾は物質的なものが多いですが、精神的な面のものもある。故に、“文化”と組み合わせているものは全て人類そして人類に関係することである。例えば、人類自身を装飾するのは人類文化があり、人類の歴史を装飾するのは歴史文化であって、言語を装飾するのは言語文化であり、建築を装飾するのは建築文化である。また、食事を装飾するには食文化があり、服装等を装飾するなら服装文化があり、人類社会を装飾するのに社会文化がある、思想を装飾すること

16　前出『大漢和辞典』（大修館書店）第五巻、第569頁。

で思想文化が生まれるのである。さらに、風俗を装飾するなら風俗文化が生まれるのであって、宗教を装飾するには宗教文化があるのである。

このような粉飾することは人の理念や、知識、技術等の発展と密接に関わっている。これらのことの変化に伴って、人類が自分を装飾する手段や、内包も変わってくるのである。故に、“文化”は時代の変化にしたがって変化しているのである。また、違った地域には違った文化がある。違った時代には違った文化がある。例えば、地域を飾るのは地域文化であって、都市を装飾するには都市文化があり、農村を飾るのは農村文化であって、町を飾るのは町文化であり、中国を飾るのは中国文化であって、青銅時代を飾るのは青銅文化であり、唐時代を装飾するのは唐文化である、日本を装飾するのは日本文化であって、縄文時代を飾るのは縄文文化であり、弘仁・貞観時代を飾るには弘仁・貞観文化などがあるのである。

上述のように、文化はさまざまな分野、さまざまな地域に存在している。つまり、人間のあるところには文化がる。ですから、今では“文化”は一つの笊であって、どんなものでも入れられるという皮肉的な言い方が現れているのである。それは正に“文化”というものを高いレベルのものと勝手に解釈することに問題があると思われる。文身という“文”の語源から考えてみると、“文化”は高尚的なものではないし、下卑的なものでもない。一方的に“文化”は高尚的なものであって、或いは下卑的なものであると理解してはならないと思う。当然ながら、文化は人類や社会にとって其の価値が高いかどうかの違いがあると思う。価値の高い文化を保存すべきで、研究の対象にも成れるのである。一方、価値の低い文化は無くしてもいいのである。

また、文化は精神的な表現と物質的なものがある。つまり、顕在的な文化現象と抽象的な文化現象である。物質的な文化現象は顕在的であって、見ればすぐ分るのである。例えば、建築や、芸術品などである。一方、精神的な文化現象は人の行動や、言語思想、人に対する応答、躾などである。当然ながら、このような精神的な文化現象は最終的にも見える形となっているのである。即ちこのような文化現象は人の日常の行動に表しているのである。

五、結びに

以上、本稿は“文化”という語彙の本来の意義とそれに関連して形成したさまざまな社会文化現象を分析してきた。つまり、文化というのは人類や、人類社会を装飾するものである。人類のあらゆる行動はすべて装飾する対象となるのである。故に、さまざまな名詞が冠された文化が生まれるのである。これらの文化は人類社会の隅々に存在している。人間のあるところには文化がある。平常心で“文化”を理解して、いろんな分野、いろんな地域で価値の高い“文化”を保護して、促進していくのは現代人類の重要な責任ではないかと思う。

二〇一二年五月三十一日新潟大学にて